13. 血管撮影時におけるUS angiographyの有用性について

Clinical usefulness of ultrasound angiography
in the arterial angiography

東京慈恵会医科大学附属青戸病院

○曾根 和久 ・ 堀 洋児 ・ 其田 梓 ・ 石田 博英
 (Kazuhisa Sone) (Youji Hori) (Azusa Sonoda) (Hirohide Ishida)
 今井 元和 ・ 新里 善孝 ・ 揚出 泰弘
 (Motokazu Imai) (Yoshitaka Shinzato) (Yasuhiro Ageide)

我々は、CO₂ガスを用いた US angiographyをTAEやリザーバー設置時において最適な位置への誘導や腫瘍の区域及びその栄養血管の判定に有用であったので報告する。

1例目は、カテーテルの誘導に関して肝細胞癌の胸部転移の症例で、腫瘍が大きく複数の動脈により栄養されており、そのうちの主たる二本に注目してみた。

まずその一方においては、腫瘍に近い位置とそれより中枢・末梢束の三ヶ所においてCO₂ガスを吹いた。中枢と腫瘍に近い位置では、腫瘍内側3分の1が良く染まり末梢束ではほとんどガス像が見られず、これよりTAEを行なう位置の確定ができた。もう一方においても同様にカテーテル誘導を行ない、のこり3分の2が良く染まる位置を決めTAEを行なった。両側ともにTAE後のUS angiographyにおいて、ほとんどガス像が見られず的確なTAEが行なわれたと言える。

2例目は著名なLCにHCCの合併症例で、通常の超音波像では著名な結節が見られなかった。しかし、US angiographyを行なったところ両葉において、瀰漫性に多発する結節を認めた。これにより、肝全域においての動注療法がおこなわれた。

3例目は通常超音波像では腫瘍が前区域に存在するように見えた例で、腹腔動脈にてのUS angiography像においても同様に前区域に存在し、前区域枝にて栄養されているように思われた。しかし、実際前区域枝にてCO₂ガスを吹いてみると腫瘍の栄養血管でないことが分った。そこで、次に後区域枝にてCO₂ガスを吹いてみると良く腫瘍部が染まり栄養血管であることが分った。このことより、この位置にてリビオドールを注入した。これにより的確なTAEが行なわれた。

最後に特に選択的にカテーテル誘導できた例で、腫瘍部のみにリビオドールが取り込まれたもの以上4例を報告した。

結果としてUS angiographyは腫瘍の局在診断に有用であり、また、TAE・リザーバーの最適位置へのカテーテル誘導が容易で、かつ精度の高い治療をおこなうことができる。